

法華寺旧境内・海龍王寺旧境内の調査(平城第656次)

8月から10月にかけて、現在の法華寺の北、海龍王寺の北西にあたる場所で発掘調査をおこないました。調査地は、光明皇后の発願になる法華寺と、それ以前より存在し「隅寺」と呼ばれていた海龍王寺の境内北部、かつ両寺のかつての寺境付近にあたりと推定されています。ただし、寺境の正確な位置や、境内北部の様相はあきらかになっていません。また、法華寺は光明皇后が父である藤原不比等から継承した邸宅を奈良時代中頃に尼寺に造り替えたため、奈良時代前半の当該地は邸宅の敷地内だった可能性も想定されます。そのため、今回の調査では、奈良時代を通した当該地における土地利用の変遷の解明が期待されました。

今回は南北に長い約600㎡の調査区を設定しました。今回の調査区のすぐ北側でも昨年度に調査をおこなっており(平城第653次)、古代や近世の南北方向の溝と、奈良時代とみられる複数の掘立柱建物跡を検出しています。今回の調査でも、同様の遺構の検出が予想されました。

発掘調査で検出した主な遺構は、南北方向の溝、柱穴列、大土坑、掘立柱建物跡などです(写真1)。



写真1：調査区全景(北から)

南北方向の溝は、調査区北半で重なりあうように4条検出しました。もっとも古いものは古代、もっとも新しいものは近世で、昨年度に検出した南北方向の溝と一連とみられます。調査区の南半では、南北に並ぶ柱穴列と大土坑を検出しました。柱穴列は11基、約33m分を検出しており、掘立柱の柵や塀などの遮蔽施設の可能性があります。大土坑は、東西2.2m、南北4mほどの大きさで、中からは多量の瓦や、竈や甕など調理に関わる土器、鍛冶に関わる鍛造剥片などが出土しました。不用品を廃棄した穴とみられます(写真2)。掘立柱建物跡は調査区北半で6棟検出しました(写真3)。建物の位置が重なっていることから、建物の建設、取壊しが頻繁におこなわれ、活発な土地利用がなされていたことがうかがえます。そのほか特筆すべき遺物として、緑・白・褐の色釉を施した奈良三彩の陶器や瓦も出土しています。

今回の調査によって、法華寺・海龍王寺の寺境周辺の土地利用の様相の一端があきらかになりました。10月5日には、近隣にお住まいの方へ見学会を開催しました。今後の周辺の調査にもご注目ください。

(都城発掘調査部 高野 麗)



写真2：大土坑の堆積の様子(北から)



写真3：掘立柱建物跡(北から)